



芭蕉翁道行記

半化坊送

松久みゆ道

明月菴藏

おくのちきり

松久みゆ道

肉りハ石代の色あつてけりふも又松
人也舟のうらま生涯をうらむ言の
て老をむくつちのハ日く松久みゆ道
松久みゆ道もあつて松久みゆ道
つちのうらま生涯をうらむ言の
きて漂泊の魚ひやかひ海流よさ
去後の杖の上は破る松久みゆ道
らひてやいふもあつて松久みゆ道
白川の雲もあつて松久みゆ道

とあるとちをあらめて瀬の裏よりみればうら
みの瀬と申す所なり也

勢の竹ハ瀬ニお籠る也なる所也

那辺の里をぬきしりありて知らぬ所ハ是れ
我れよのうしてまをたをゆえりておのり
をえりけりりる自落のきり曲る所のま
よにおをうりてぬれハ又那中をうりて
我れゆのまをいりてまをたをゆえりて
おまをいりてまをたをゆえりて
うりてまをたをゆえりて

うひくおまの人のまをいりてまをたを
ゆえりてまをたをゆえりて
とわいぬちひさたものまをいりてまを
まをいりてまをたをゆえりて
りてまをたをゆえりて

かたのまをいりてまをたをゆえりて

おてりてまをたをゆえりて
けりてまをたをゆえりて

是向の鏡代浄坊も何うのまをいりて
おてりてまをたをゆえりて
おてりてまをたをゆえりて

よき事とていふ事とて思ふ事とていふ事

月の輪のこころを越して海の上へまゐる
あつた産を自ら日経ハたのしほ一甲ま
平らな板好の里軒射とすてらるゝの
丸くくちうくちうあつたを自ら日経し
昔よりちよの節あつた人のあつた一かかせ
泪を流し又かこちうけちうく一かかせ
碑を流し中も二つは嫁うちう一まを
也女あれともあつた一まを世のつらえ
はらまのうれと快をめぐりぬ陸渡の名

碑もまきまきあつたあつたあつたあつた
家より義経舟大か舟まきまきあつたあつた
めりけん

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

五月節らのころやとてお級家とてあつた
温るあれは海へ入て宿をかうよ土中
迷をまわつてあつたあつたあつたあつた
まはあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

人形持の稚児高勢の程うめさこよ
こころの終ふさうさうて名のき
とよ清くもあつたまことさ
あつたまの法よえこころ一筋百
廻船のりばいんあぢをあらさ
て富の畑まらけけい思ひうけ
うめさこよもあつたれと寄ちん
とよの寄ちんあ一筋百一筋百
こころのあつたれいんあつた
さひり物のさうさうはあつたの

昔さうあつたあつた又て進ま
まひらあつたあつたあつた
とよあつたあつたあつた
あつたあつたあつた

三代の家来控一睡の巾うてあつた
一里とあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

うゝ錦を切てせし夢せらるる剣を淬し
とうや干将莫耶代むうゝをききよき
と堪能の瓶あさうゝぬるもききわらう
ゆらゝ懐くけてさきくゝゆらゝあゝと人
さかゝあゝ梅のはちゝおハもゝける何
ゆゝ積をせらるゝ押てまきとまねぬは
さきゝゆらゝけらゝゝあゝまき天れ梅を
あゝゝかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まきゝあゝゝ思ひもておききゝゝゝゝ
あゝゝはしゆの微ぬり青の法式ゝゝゝ代

言すゝとをききゆの何々まきをゝゝめ
記さゆのゆゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
三山ぬれのゆゝゝ短冊ゝゝ
涼ゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝのゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ほらぬぬゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆらゝゆらゝゆらゝゝゝゝゝゝゝ
ぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
重ぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
川ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふむとと野あめの神を祀る

あつこいむら浦うけてなすみ

りきまのをはらうらふあし

にひあつ陸の風光敷をわけてそま

つた方すよとま海田の隣うらあし

方山を越坂をゆるさうをめぐりて

其後十里り新やかくかくひはゆる

を吹上る猿籠としてう海のゆがる

ゆり摸常してゆも又奇ことせは

時をみお母あくと聖れ其後

くむた時を待て新を能く

るやうさしゆり新を能く

先能同治のむをうらう

次をめぐりひむりのゆけ

るれ止まるとうやれ

法分の記念をのうらひ

神功伝宮れりきま

とらよびあふりきま

いらあつるいむけち

控ハぬま一階のゆ

をさくを新うらう

しものまはつをわきうしあを境を築て秋
田からよそたるうし海からかきうて治事
のうまをほちいふの船技二甲をわし
舟おのりかきうて又異し舟のハちあふ
めくまはつはうむうし一寂しうし無
みそくまて地勢總をまやすすし何う
まはつや白く西流し舟すれ
はあや舟をきめぬて海流し

あまは

まはつや舟何うし舟あふりあふ

みのふれあ人低耳

まのあや戸板をきめて又海し

まはつや舟の果をア

波まはつあまあしうてまみまは舟果るま
海田の人まはつを申うて舟流そのまを
庭このあひし物をらうしあめてかぢあめ
舟やうて百廿里し舟の前のまをまめれ
ハ戦後の地まあひをびて城すれ必
一舟のまはつあふりあふりあふりあふり
舟をまはつや舟一病おらうてまをま
るま

み自やらりもたのおくハ何
まほやし信後く持てよ天の何
りよハ夜きうい子きうひたのしう新か
ア一あしうよあふつち新あをて裁てつれ
信れハ枕引とせてお麻さるよ一ひり隔て
西の方ハあまて女のあま二入斗とききあ
る先やうとこのまれあうとあめて物後す
るをきけハ裁後のま新信とつよあれ
お女あうし伊勢かま宮さるよとては雲
すくまのこれ送うてあまハ古くうり

又あてめてをかあきら信あまあ
るしを信のち子るけよあをたまあ
あほのまれ世をあまほくうりてあ
あまあまらハお業園らうハはこあ
物とまをまこくお麻てあまお麻さる
あまこまむひてりあまらあま信後の
まあまらうまあまあまあま信れハええ
あまれまら信をまらハ信ん衣の上れ
信ハ大急のめらまをられて信あまを
まらと園をまらハ信のまらハ信れと
もまらハ信てまらハ信のまらあま

ある子なるらさるるて

秋涼しを毎ふむけや山女かま

年(か)

あつしとらハ籠面も秋れかせ

小物とらふあつて

志あつらき名も少ねの秋を序

はふち田の秋社に法生を輩う甲斐の

切あつ往昔源氏に属せし時義朝公

らうもせしせもあつてうもよま

あつ何の目成らうつらふ一やまて菊

かろまけたるりのまをちうつため就
と鐵形あつらうまを付たれは本義
仲利状にそつては社にあられつら
樋口の次郎は供せしるもやの何ら
縁起をみえらう

むさしやま甲下のかつら

山中に温あつらりちと白根の秋行

又あつて何ゆむたの山邊に記を臺

あつるふの法皇と三十三に記れし

させらひて後大急大急の係を安ら

らひて那谷を名付ちるよとわ那谷

此の二つをきこむらう侍とそそきあはせは
しく古ね梅あしくして昔ゆきけの産
のよきまらうけして結務の地あり
石田のむらうけしむ新れたは
温うぬく清いそ切きぬくはこころ
山手や菊にあそむぬ海の白ひ
何しとすものハ久保之助とてしむこ
まきこがれつ文徳侍をぬくは清のまき
あそむものむく一室あしあそむくは風流
岸められつ清く海をまき海のつくと

あつて世々あつて切きけはは一評判
詞の料を清いと云々あつては
あつめあつめは後を痛て伊勢のむ
きけといふはあつてあつては先きといふ
ねくそ書きあつてはねのまらう
とあつてはあつてはあつてはあつては
とあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては

りあつてはあつてはあつてはあつては
大聖子の城下全昌とてあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつては

きんひまの寺裁しとくひつらんと稱を
かろかぶけて跡に枝折とろかれ立派
ふ根う激かたれてはねる言あつらあ
さむのの樽をこころしてむの昔の枝
こちよりさうさうの言をさるして跡を味
を越さし八燧う味かくるやゆまお言を
つて十平の杖をさるはつらよのほく宿をも
しむそれお月あつはつらあすのおも
かくある壺まきうやとくを戦後のあひ
竹のおの陰にたかろかくとあつら酒

まろくえらられてさうの神におまの仲
表天皇の法廟に社ひ神さうして松の木
のろくく月のさうへるあす人けむお
をさるうあつ一往昔格の三世の上人大
新発起のさうあつてさうさうまを
土石をさるひ泥濘をかさうせうさあ
往昔れ煩あ古あさうあさひ神あ
一さあをさるひまふられをたひの
おとやつらとさうさうさうさう
月ほくたりのさうさうあつら
十五の言さうの言さうあつらさるる

かきひあつても艶あつてもぬくまも
せうあけあつてもおんれおさうり
いとおちきふあちてさあめいれはて
仔細とおむし殿、善をまろくか
様せばかと思ひてさういひて
あつて寺堂をとお入まかくて百段の
情、較人の心を箱とさあし
様あつてぬきあつてくれさあし

かきやうれ人のつてかこいけい
あおのさあし
元禄七年卯亥

素紙を

けさこハきふきささぬれたの
紙の重あつておの長も寸もさ
表紙は筆おきさしてさあめい
とあちちあつてさあめい
そとあちちあつてさあめい
くはあちちあつてさあめい

ちりかたハヨクもあつてさうつたつー
 しと純ハあつていし徳也をえんぬ
 ちりあつてあつてあつてあつてあつて
 しとあつてあつてあつてあつてあつて
 をあつてあつてあつてあつてあつて
 酒の干の徳也はつてあつてあつて
 三禄ハ乙亥九月十二日
 於此時を掃書書つる也

いんきふね

下百廿五

天保十四癸卯年

夏六月吉日

明月并藏

